

Title	児童学研究 相川徳孝氏報告「キリスト教保育の実践と課題」
Author(s)	田澤, 薫
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.22-No.2, 2013.1 : 15-18
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/rep/modules/xoonips/detail.php?item_id=4344
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

児童学研究

相川徳孝氏報告「キリスト教保育の実践と課題」

田澤 薫

2012年度3回目の「〈児童〉における総合人間学の試み」研究会が、9月26日に開催された。今回は、相川徳孝氏（聖学院大学児童学科）が「キリスト教保育の実践と課題」と題して報告くださった。聖学院大学児童学科は、キリスト教保育を担う保育者の養成校として、またキリスト教保育における指導的役割が期待される研究・教育機関として位置づいている。今回は、キリスト教保育について学び合う貴重な機会となった。聖学院大学附属みどり幼稚園からも参会者を迎え実践者の立場から議論に加わっていただけたことも有難いことだった。以下は報告の概要である。

キリスト教保育と「キリスト教保育連盟」

日本のキリスト教保育は、約120年前にアメリカ・カナダ・ドイツ等の宣教師によって、教会に属する宣教の場として実施されたことに始まり、各地に広がった。キリスト教主義の幼稚園が共に学び合う場としてJKU (Japan Kindergarten Union) が組織され、その後、ひろくキリスト教保育の振興に寄与する団体として1968年に社団法人キリスト教保育連盟（以下、キ保連）が設立された。

現在、キ保連には全国のプロテスタントのキリスト教主義に基づく幼稚園・保育所・養成機関が加盟している（加盟総数870園：幼稚園601園、保育所183所、保育者養成機関が30校、聖学院大学児童学科も加盟、会友として「加盟施設にかつて勤務していたキリスト教信徒である保育者」56名）。キ保連の事業内容は、キリスト教幼児教育・保育の内容・指導方法の調査研究、保育者の現職教育、幼児教育の指導者を育成するための研究会・講演会開催、月刊誌『キリスト教保育』（以下、キ保誌）の出版等である。キ保誌は、当該月の保育を具体的に学ぶ参考書として編集されている。月の聖句をもとに保育を考えていく手掛かりと月次第が提示され、そこから保育の生活を考えていくこ



相川徳孝教授

とができる。つまり、キ保誌からは子どもの見方や保育の組み立て方のヒントを得ることができる。

キ保連は全国組織の下に地域ごとの部会に分かれ、各部会の下には様々な委員会がある。幼稚園に傾き過ぎているという批判に応え、1989年には保育園委員会も設置された。

キリスト教保育指針

幼稚園・保育所の保育を方向づけるものとして幼稚園教育要領と保育所保育指針があるが、キ保連ではそれに加えて、キリスト教保育独自の指針を示している。

キリスト教保育の指針は、1965年にキ保連が作成した「幼児のキリスト教教育指針」が初めてである。もともと具体的な保育内容はキ保誌に掲載していたが、総括的な指針を求める声が強まり策定につながった。その後、1976年に「続・幼児のキリスト教指針」、保育園委員会が設置された1989年に「キリスト教保育指針」が出された。以来、キ保連では「保育」という言葉に教育と養護的な配慮を含めた包括的な意味をもたせて使用している。指針の解説書『今を生きる』も作成された。さらに2000年には、少子高齢化・多様化する保育ニーズなどに目配りした「改訂キリスト教保育指針」が出された。最新版は、2008年の幼稚園教育

要領・保育所保育指針改訂を受けた、2010年の「新キリスト教保育指針」である。同指針は、従来より文言が平易になり、子どもの最善の利益を求める視点に加えて保護者との関わりについて加筆された点が特徴的である。これらの指針は、国の幼稚園・保育所の制度改変に対応しつつ、キリスト教保育の立場での保育を模索する中で改訂されてきている。ここでは、「改訂キリスト教保育指針」よりキリスト教保育の定義を示したい。

「キリスト教保育とは

子どもが、神によって創造された存在として、
神の恵みのもとで育てられ、
イエス・キリストを通して示される神の愛に気づかされ、

今の時を、喜びをもって生きる者とされ、
そのことによって生涯にわたる生き方の基礎を
培い、

共に生きる平和な社会と世界をつくる自律的な
人間として育つために、

保育者が、
イエス・キリストとの交わりに支えられて共に
行う

意図的、継続的、反省的な努力であり、働きで
ある。」

幾度かの改訂でも基本的にはキリスト教保育の説明としてこの文言は変わっていない。

キリスト教保育とは

キ保連の原和夫理事長は、指針を受けて「キリスト教保育は、キリスト教信者と信者でない人とで、ともに協力し合って創り出す保育」であり、「保育という働きを通し、人間とは？保育とは？私はどう生きたらよいのか？などの問いをもちつつ、子ども（人間）の育ちに仕える働き」であると説明している。牧師職の園長は保育者がキリスト教信者であることを求める傾向にあるが、信者とキリスト教に理解のある信者でない人が協力し合って作り出す保育が趣旨に合う。キリスト教保

育では、よく「子どもから学ぶ」というが、子どもの姿に照らして保育者自身のふるまい・言動・生き方を問うていく。

指針には、キリスト教保育のねらいが以下の通り6つ挙げられている。

1. 「子どもが自分自身を大切なひとりとして受け入れられていることを感じ取り、自分自身を喜びと感謝をもって受け入れるようになる。」

キリスト教の子ども観に通じ、ありのままを受け入れることが自己肯定感と他者との信頼関係構築の基本であることを意味する。その基盤は、保育者自身の自己肯定感である。保育者が信仰の有無で排除されることなく、協働者として受け入れられる実感が大事である。

2. 「子どもとともに祈り、賛美し、礼拝を守り、聖書に親しむことによって神への信頼感やイエスとともに歩む思いが培われていく。目に見えない神の存在は、保育者と子どもとの日常的な関わりを通して子どもに伝わる。（礼拝・祈り等）」

キリスト教保育では礼拝が大切にされる。礼拝の参加者がともに祈り賛美する霊的な雰囲気の中で、子どもたちは見えざる大きな存在に気付いていく。当然、保育者の姿勢が問われる。

3. 「子どもたちそれぞれの家庭環境や文化的背景を受容し、他者と異なる者、違いのある者同士が理解し合い、共に生活する場を大切にする。」

子どもたちに、将来、共に生きる豊かで平和な社会を創出する素地を育てたい。このことは、障害がある子どもも保育の仲間として積極的に受け入れることを意味する。ありのままの自己存在を肯定することとつながっていく。

4. 「自然の中で動植物に接する経験、絵本、素話を通して物語の世界に遊ぶこと、身の回りの材料を使って工夫しながら製作する活動等を通して、子どもの自発性や創造力が培われる。そのためには子どもの主体的な遊びをささえるための環境と物事にじっくり取り組むことのできる時間の保障が必要である。」

廃材等を用い「無」からイメージを膨らませることに子どもは夢中になる。子どもが心を動かし探求し判断し、創造力を持ち、創造的にさまざまな事柄に関わるようになる。

5. 「自然を大切にし、他の人びとの幸せを願い、今できることを考え行うこと。それが隣人を愛し、神を愛することにつながっていく。」

子どもが自然や社会を神による恵みとして受けとめ、それらの事柄に関心をもち、自分たちのできることを考え行うようになる。例えばクリスマスに献金を捧げる他者について知ることから、自分たちに何ができるのかを模索する機会となる。子どもたちの視野を広げる役割を担う保育者自身が、まず感じなければ子どもには伝わらない。

6. 「他者との葛藤体験をとおし、相手の気持ちを受け止めること、そしてしてよいことといけないうちに自分自身で気づき、主体的に判断して正しい行動ができるように導く。」

保育の中で伝える場面は多いが、「だめでしょ」ではなく、なぜ受け入れられないのかを主体的に考えていけるような働きかけを行う。賛美歌の「悪の誘いにひかれる時も行くなと私を留めてください」という歌詞の通り、子どもが、してはいけないことをしようとする思いが自分の中にあることに気づき、そのような思いに負けない勇気を持ち行動できるように育てたい。

キリスト教保育における子ども観

「イエスに触れていただくために、人々が子供たちを連れて来た。弟子たちはこの人々を叱った。しかし、イエスはこれを見て憤り、弟子たちに言われた。「子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。はっきり言うておく。子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない。そして、子供たちを抱き上げ、手を置いて祝福された。」(マルコによる福音書10章13～16節：新共同訳)

子どもをひとりの人格として受け入れることがなかった当時の一般的な習慣に反して、子どもの存在それ自体をあるがままに受け入れる言葉である。社会的地位を求める価値観と異なり、小さき者に向けられるイエスの愛・生き方を示している。子ども一人ひとりを大切にする根拠が聖書にあることが、キリスト教保育の特性である。

キリスト教保育における保育者観

神が私たち一人ひとりのあるがままを受け入れ、愛し、子どもと共に生きる働きの場を与え、その働きを通して人はどのように生活したらよいのかと問い続けるようにこの場に招いてくださっているという召命について考えたい。働く人は、何かしらの導きと共にそれぞれの担う役割がある。特にキリスト教保育の場では、初めてキリスト教に触れる保育者も何かの導きがあってそこにいることを大切にしなければいけない。

キリスト教保育の研修

今日、様々な問題からキリスト教保育を担う人が育ちにくなっている。第1に、キリスト教に触れたことのない保育者が多く現場に入ってくるようになった。教会学校から教会で導き出されて保育の道に進む人が主体ではなく、保育を勉強して就職した先がたまたまキリスト教保育だった例が多い。第2に、保育界全般に共通だが、一時期



採用を控えたために経験を積んだ中間管理職（主任クラス）が少なくなり保育現場でキリスト教保育の実践を伝える力が希薄になった。以前のように、主任保育者が独特の雰囲気をもって園を牽引していることは少ない。新しく現場に入った保育者がキリスト教保育を担うには、力不足が否めない。第3に、教会附属園の場合は園長が牧師で必ずしも保育の専門ではないために、キリスト教保育実践のリーダーとしての指導力が不足していることが多い。牧師の発言力の重さもあり、保育現場との齟齬が生じることも少なくない。牧師の転勤で園長が代わる教会附属園では、園長を務める牧師の価値観によって代ごとに保育内容が大きく変わることもある。第4に、特に保育所に顕著だが、日々が多忙であり園内研修等キリスト教保育を学ぶ時間が取りにくい。園内だけで若い保育者を育てることが困難になってきた。こうしたなかで、キ保連の研修が重視されるようになった。

例えば関東部会では、研修会は2006年から年3回・2年サイクルで計画している。2006年・2007年はテーマを全く同一とし、参加者が見通しをもって発題しやすくした。この時期は、参加者から次々に子ども姿や保育の悩みについて話題が提供された。同僚には話せないことも研修では話し合え、勤務園の枠をこえた保育の同労者を作る目的も果たしていた。ところが、次第に研修会の雰囲気が様変わりしてきた。「保育の中で何か悩んでいることない？」と呼びかけても参加者が口を開かない。そこで、司会者が先に問題を投げかけておき、質疑応答の中から話を引き出す工夫が必要になった。

2010年の第1回研修「キリスト教保育って何だろう」の参加者61名中、「勤務園でキリスト教保育指針を勉強した人」が3名しかいなかった。当然ながら、多くの参加者がキ保誌の活用方法についても知識がなく、形だけを整えて日常の保育を組み立てていることが分かった。そこで、研修の半分を講義形式とした。

2011年の研修時に、8月の夏季保育で初めて行う「聖書の話」について困っている新人保育者がいた。園長や主任には「キ保誌にある平和のことを話せばいい」と言われたものの、本人は8月がなぜ平和の主題と結びつくのか理解していなかった。この現実から、研修の場で若い保育者に丁寧に礼拝の意味を説明し、「お祈り」や「お話」の方法を伝えないとキリスト教保育を担う人は育っていかないと再認識した。

キリスト教主義の保育者養成校への期待

聖学院大学児童学科はキリスト教保育の担い手の育成を期待されている。「信者でないがキリスト教の雰囲気が好きだから教会附属園で働きたい」という者も含めてキリスト教保育を希望する学生、また、子どもに対する価値観など保育センスとしてキリスト教保育の場で伸びると思われる学生を、良質なキリスト教保育の現場に送りたい。

また、養成校として、キリスト教についての基本知識をしっかり教育する責任がある。

「キリスト教幼児教育」の授業担当として保育に理解の深い牧師を依頼し、キリスト教保育の場における聖書の話の考え方や伝え方等の具体的な指導を行っている大学の例は示唆的である。あるキリスト教主義大学の実習生が、聖書・賛美歌を携行しないことが問題になったことがある。教会附属実習園に日曜日実習の欠勤を養成校から要請し、実習園の怒りを買う例も起こっている。実習園では「教会の礼拝があって初めてその週の保育がなされる」という認識である。キリスト教主義を標榜していながら実質を伴わない養成校も増えてきており、聖学院に対する期待は大きい。

（たざわ・かおる 聖学院大学児童学科教授）